鯉ヘルペスウイルス病（KHV）とビオトープ（Biotope）

佐藤 透

このところは少し忙しくて、川魚の採取に出かける機会はやや減ったものの、素手取り捕獲とその後の水槽飼育は相変わらず続いている。今回は水庭(池)の鯉と鯉ヘルペスウイルス病（KHV）の怖～い結末と、そのあと水辺にやってきたビオトープ（biotope）のお話です。

この夏も金魚の里、福島県郡山市での発生が話題にのぼった鯉ヘルペスです。あれは2003 年 10 月上旬のこと、全国のコイ生産量の大半を占める茨城県霞ヶ浦でコイの大量死が発生し、感染コイの出荷に伴って、またたく間に岡山・広島を含む全国 23 県へ蔓延してしまった。どうなることやらと気をもんでいたら、冬場に入り自然と発生しなくなった。鯉ヘルペスウイルスが増殖する至適温度は 18～25℃で、13℃以下と 30℃以上の温度環境では増殖せず発症には至らないとのこと、でも感染ウイルス自体が消滅したわけではなかった。

閑話休題、農林水産省のホームページ（http://www.maff.go.jp/koi/）を開いてみると鯉ヘルペスウイルス病は、マゴイとニシキゴイのみに発生するKoi herpes virusの感染症で、死亡率が高い不治の病（つける薬のないコイわずらい）とされている。しかし、そこに書かれているのは、やれ鯉ヘルペスウイルスは鯉以外の魚や人には感染しないとか、仮に発生した池や湖の魚を食べたとしても人体には全く影響がありませんなどと、もっぱら“もみ消しゴム”の安全宣言とでもいうべき内容である。国庫補助事業として国内での鮎の放流などを一手に引き受ける全国内水面漁業協同組合連合会のホームページ（http://www.naisuimen.or.jp/carp/index.html）にいたっては “昨年日本各地で鯉ヘルペスウイルス病が発生しました、しかし食用コイは安心です、安全です、「人」にはうつりませんし、おいしさも変わりません”とある。鯉ヘルペスウイルスの風評被害に“コイはとても健康によい魚です”とか、“小野小町も食べていた日本古来の「鯉料理」”とうたって、伝統的な鯉料理のﾚｼﾋﾟを載せて、防戦一途のPRに終始している。ちょっと待つてぇな、ちかごろ流行のBSEや鳥インフルエンザもそうだけど、鯉ヘルペスウイルスってほんとうに大丈夫なの？

鯉ヘルペスウイルスを発病すると、鯉の行動が緩慢となり餌を食べなくなるが、そのころはまだ目立った外部症状は見られない。やがて鰓の退色やびらん、鰭がただれたり鱗が剥げたりと徐々に変化が現れ、やがてすべてが

死に至る。魚や生き物を飼って分かることは、えさ喰いが悪いものや仲間と外れて隅っこでじっとしてるってのは、野生なもの原始的なものほど、素直に病気なんだよね。人間社会だって医者の世界だって、結局はいずこも同じかもしれないけど。

現在のところ鯉ヘルペスウイルス病に有効な治療法はない。あら塩を思いっきり散布しても、エルバージュにどっぷり漬けてもダメ、天然水域の清流でさえ手に負えないんだから。感染したコイから水を介する接触で別のコイへと広がる。ただひたすら、いかにして蔓延を防ぐかが唯一できることになる。これって、感染したコイの抹殺あるのみってこと！

鯉の異常死や大量死で鯉ヘルペスウイルス病が疑わしい場合には、最寄りの水産試験場に連絡する。鯉ヘルペスウイルスの一次検査で陽性がでれば、さらに独立行政法人）水産総合研究センター養殖研究所（http://www.nria.affrc.go.jp/index-j.html）でPCR検査が行われる。果たして鯉ヘルペスウイルスの感染が確定診断されれば、直ちにプレスリリースとなる。鯉ヘルペスウイルス病は、持続的養殖生産確保法（http://www.ron.gr.jp/law/law/jizoku_y.htm）における特定疾病に指定されており、発生した場合には、天然水域では鯉の移動禁止処置、養魚場施設ではすべての鯉の焼却処分と施設の消毒などの蔓延防止措置が取られることになる。

サギ太くんの遊び場の水庭は、ほにゃほにゃ金魚、川で捕まえた雑魚、釣堀で釣り上げた雑鯉の放流から始まった。しかしその後、錦鯉のつわものどもが溢れる養魚場へと変貌するのに多くの時間はかからなかった。ちかばの鯉養魚場を訪ねてみたが、ろくなもんはおらん。そこはやっぱり、インターネットショッピングだね。早速、ビッダーズ錦鯉オークション（http://www.bidders.co.jp/koi/index.html）を開いてみた。オークションに出品された錦鯉は、種類分類、年齢性別、生産者の氏素性が明かされ、いろいろな角度からの写真が 2-3 点ついている。中には堂々と池を泳ぐ錦鯉の動画をつけたものもあり、思わず身を乗り出して見入ってしまう。出品者のキャッチコピーもまたおもしろい。たとえば、大塚産五色三毛、47cm、3 才、♀、品評会用立て鯉、“蛍光色を伴った明るい厚紅が、全身にバランス良く配置されています。青みを帯びた五色の地体が出現し始めたところです。墨は、ほぼ壷墨風に上がり始めています。肩口の変化模様は、芸達者で面白みがあります。五色の品評会用立て鯉です。夢を追いかけられる五色です！”、なぁんちゃって。これには正直弱いところがあるなぁ。

出品されているお店の品々をつぎからつぎへと片っ端からネットサーフィンする。しかし、すぐに入札は入れない。気に入ったものはまずウオッチリストにあげておく。“もうすぐ入札締め切りです”との e-mail を 24 時間前に受け取って、ふたたび商品ページをあけて入札状況と終了時間を確認する。し

かし、ここでもがまんして入札しない。締め切り 5 分前になって、やっと初めて入札する。通常入札はその指し値で、自動入札ではその値まで機械的に応札を繰り返す仕組みである。

早めに入れるとんどんと値が上がることがある。締め切り 5 分以降、3 分以降では、それぞれ 3 分間の自動延長となり、相手との腹の探りあいになる。時間があれば、入札相手の履歴を眺めて傾向と対策を瞬時に練る。区切りのいい値段よりも、端数のある語呂合わせの数字がいい。複数の入札が重なった場合や、ネットが混み合った場合には、更新されずにみすみすチャンスを失うことがあり、残念無念。これってのに出会ったら、残り 3 分以降はパソコンに張り付いてさしの勝負に出る。相手もさるもの、いつもいつまでもがんばり通すわけではない。あるときは最後まで勝負して、あるときは当て馬だけで早めに降りる。勝負師として、いつも冷静に全霊を傾注して応札する。ただ、勝負の勘をどがちゃがにする最大の敵は、何といっても一杯飲んだアルコールかな。今日は鬼になって、どこまでもやったろうじゃにゃーかなんてやってるから、一桁間違えて確認ボタンを押してしまい、あぁ、やっちゃったぁ。“あなたが落札者に決定しました”という e-mail に、商品の受け取り方法、代引き、日時を指定して返信する。やっと落とした戦利品、手元に届くまでのあの楽しみはいつなんどきとも変わらない佳きものがある。

2004 年 10 月 23 日の新潟県中越地震の時には、錦鯉の里、新潟小千谷市や山古志村は相当な被害だった。おなじみのショップから、“昨夜より取引先の鯉やさん数件に連絡いたしましたが、本日午後4時頃にやっと1軒だけ連絡とれました。そこでは、山の野池の鯉は地震で放り出されてしまっただろうと言ってました。そこの家のコンクリート池は水が半分程度になったそうです。停電のため発電器でポンプやコンプレッサーを作動させているそうです。それでも、命があって良かったと言ってました。それほどにひどい地震だったようです”、と e-mail 連絡が届いた。かつて新潟長岡出身の田中角栄総理が、東京目白の邸宅庭池で泳がせて、“よっしゃよっしゃ”と餌を与えてかわいがった見事なまでの錦鯉の数々は、みな小千谷や山古志から陳情の際に持ち寄られた最高級の手土産だったと聞いている。

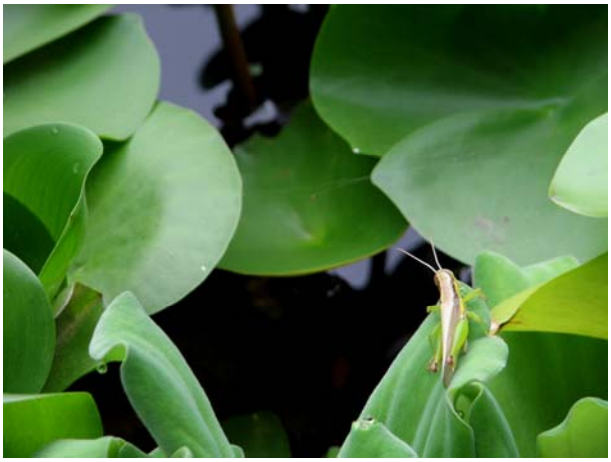
我が家の水庭は、毎週末に宅急便で届けられる育ちのいい鯉の数々で、あっという間に占拠された。紅白、昭和三色、大正三色、三毛、丹頂などのｽﾀﾝﾀﾞｰﾄﾞから、銀鱗、黄金、プラチナなどの光りもの、九紋竜、白写りなどの写りもの、鹿の子、衣などの変わりものまで、色とりどりの錦鯉がところ狭しと泳ぐ。そのなかでは、蛍光色の五色丹頂、人気の銀鱗浅黄、レアもんのアイ衣は特にお気に入りのアイテムだった。ぱらぱらと撒いた餌に波しぶきを立てて集まり、かぽかぽ音を響かせて競ってむさぼる鯉の群れを居間から眺める。朝

な夕なの心地よい癒し系のひとときだった。土曜日の午後や休日には、水庭周りのこけをブラシでせっせと落とし、濾材濾過バイオのB-4 を追加するひと仕事が俄然楽しみとなった。

そう、それはこの春先、五月の連休前後からのことだった。いつもの餌やりに乗ってこない孤独な1匹の茶鯉を見つけた。この前入ったばっかりの新入りだからねえ、遠慮してまだここの水に馴染めんのかなぁ。それから 1-2 週経つうちに、餌に集まる鯉が少しずつ少なくなってきた。以前のような元気な開口音は響かない。池の隅にかたまってじっとしている数匹ずつの鯉の集団もできてきた。お気に入りの丹頂の姿もたまにしか見れないけど、探せば隅っこをほにょほにょとは泳いでいる。

餌が大きくて食べれんのかなぁ、早速、色揚げ用の大粒から、消化のよいバイオ生菌入りの育成用・増体用で中・小サイズ混合の餌に換えてみた。水がチト悪いのかなぁ、朝夕 2 回の追加換水を試みた。アンモニアと硝酸が残ってるかもと、濾過槽に備長炭3Kgをネットに入れて漬けた。極めつけは、万病に効くエコブロックという幻の濾材で、これを大量に沈めてみた。魚じらみがおるからかも知れん、じゃあ消毒せんと、でもこの広い池にはずいぶんの量の薬液が要るなあ。こんだけすりゃぁもう十分すぎる、安心しとれるなあ、うーん、大丈夫なんじゃろうかぁ、本当に大丈夫かなぁ。まあ、そのうち鯉も腹が減ったら自然と食べに出て来るじゃろう、ではなかった。

日に日に餌に集まる鯉が減り、水庭の隅っこに潜むじっとした集団が増えた。なんじゃ、こいつら、鯉が食べなきゃ金魚が食べるっけ。和金やコメットも半年飼い込むと 30cmほどにもなり、それなりに立派な容姿を見せる。あれぇ、あの茶鯉が浮かんどる、もう死んでしもうとるなぁ。翌朝には五色三毛の立て鯉が沈んどる、やれやれ。次の日も、また次の日も。ぽろっぽろっと隅っこに固まった集団から死んでゆく。死骸を詳しく観察してみると、みんな鰓と鰭がやられとる。う～ん、どうもこりゃおかしいなぁ、単なる病気じゃないかも、ひょっとしてあの鯉ヘルペス、鯉ヘルペスウイルス病かいな、ほんまに、嘘じゃろう、くわばらくわばら。



5 月も終わりの晴れ上がった朝、一度に 5 匹も浮かんで、水庭一帯に悪臭が漂っていた。ほとんどの死骸は体全体がとろけて、掬う網の目からも一部が漏れ落ちる悲惨な状況だっ

た。翌日も、またその翌日も。う～ん、こりゃぁヘルペスじゃな、鯉ヘルペスウイルス病が蔓延しとるな、どうしようか。お上に申し出ると、きっとマスコミの餌食にしかならない。かといって、可愛がってたお気に入りの錦鯉だから、たとい肩息であっても、到底生き埋めにするなんて忍びない。鯉ヘルペスウイルスが他に漏れ出るわけでなし、せめてものターミナルケアー、終末期はこの手で看取ってやることに決めた。鯉の屍骸は、庭の竹藪に埋めた。来る日も来る日も、スコップ担いで土を掘り返しては埋葬するのが、知らぬ間に朝の日課となっていた。

金魚と草魚、そして鯉と金魚の合いの子のひれなが鯉は元気に残っていた。あ～あ、鯉はもう全滅じゃ、今となってはこいつらを大きくするのみかのう。それから2-3週間が過ぎたある日、ひれなが鯉が一匹死んで浮いていた。あれ～、どうしたんかな？。翌日には餌金の姉金とコメットが2匹、3匹と次々にうとうていった。まさか、鯉ヘルペスウイルスが鯉を超えて、金魚にまで感染したんじゃろか。あっという間に、ひれなが鯉も金魚もいなくなった。7月の終わりには、最後の頼みの綱、草魚までもが浮かんで、気が付いてみると水庭にはもはや生き物の気配はしなくなっていた。鯉ヘルペスウイルスが変異して、固有の宿主を超えて近隣種にまで感染したとしか考えられない出来事に、ウイルス感染の怖さを思い知らされた。くわばらくわばら、なまんだぶつ、なまんだぶつ。

あまりに寂しい水庭に、貰い物のホテイアオイとウオーターレタス(みずキャベツ)、それに睡蓮鉢を入れてみた。水庭の栄養素をたっぷり吸収したのか、ホテイアオイはみるみる増殖し、水庭いっぱいに広がり、いたるところで青紫の花をつけた。夜に閉じて朝に葉を開く、ウオーターレタスも負けじと繁殖した。あっという間に、水庭は一面の緑に埋め尽くされていった。横に広がる余地のない水草は、だんだんと立って育ち、水庭の淵からは水路にはみ出して伸びて、留まるところを知らない。ビオトープ（biotope；http://www.ecosys.or.jp/eco-japan/）、う~ん、これもこれでなかなかいいもんだなぁ。即席のミニビオトープに生まれ変わった水庭に、ちょっぴり癒されるこの頃となった。

水草が枯れ絶えるこの冬場には、水庭の水を全部抜いて、1週間でも2週間でもカラッカラの天日干しにしてみよう。これぞ究極の鯉ヘルペスウイルス病対策。これで水庭の池からウイルスは消滅するであろう、たぶん。そしたら満を熟して、お気に入りの錦鯉を飼い始めてみようか。それじゃ、またインターネットオークションのお世話になるなあ。しょぼしょぼ疲れ目、伸びきらない指、曲がらない手首、こわばった右肘、挙がらない右肩、そして眠れないあの夜半の日々を過ごすことになる。今度は翌日の診療に差し支えない程度にほどほどにとどめておかなくっちゃ。